研究論文

中学生が安心して学習活動に取り組める，ユニバーサルデザインの視点を意識した音楽の授業づくり
－多様性のある鑑賞を目指して－

大橋　寧々

Creating music appreciation classes with a universal design perspective in mind for junior high school students to work on learning activities with peace of mind
-Aiming for a diverse appreciation of music-

Nene OHASHI

【要約】中学校音楽科の課題として“多様な音楽経験”による「学習活への困難さ」が挙げられた。アンケート調査による実態把握の結果，本研究ではどのような音楽経験を持つ生徒でも安心して学習活動に取り組める，ユニバーサルデザインの視点を生かした授業づくりを行った。このような視点で工夫・配慮することは，生徒が豊かな知覚・感受が生かして「多様な鑑賞」を行う上で重要であり，効果的であることが考えられた。

【キーワード】中学校，音楽，多様性，ユニバーサルデザイン，鑑賞

1.問題と目的

1-1 中学音楽科における「聴くこと」とその課題

現在の音楽科における課題について，これまで受けてきた教育や教育実習等での経験から考えてみると,「生徒が音楽の学習活動に取り組みにくさを感じている。」ことが挙げられる。これらは，音楽に対しての得意･不得意,授業時間の少なさ等,「音楽」という教科による様々な特性が要因として考えられる。しかし，これらの教科による特性を上手く活用していきながら，限られた時間の中でどのような生徒も安心して充実した音楽の授業を受けられるように，指導を工夫・配慮していく必要がある。

特に音楽科では, 現在の学習指導要領(文部科学省，2017)において，「(3)音楽活動の楽しさを体験することを通して，音楽を愛好する心情を育むとともに，音楽に対する感性を豊かにし，音楽に親しんでいく態度を養い，豊かな情操を培う」ことが目標として挙げられている。そのため，生徒が音楽活動を楽しむために,“どのような生徒でも学習活動に参加することができる”環境を整えていくことが求められているのではないだろうか。

そこで, まずは音楽科の学習について, 鑑賞の授業に焦点を当てると，鑑賞では，まずは音楽を「聴く」という学習活動が中心に行われる。音楽を「聴く」という行為自体は, 人間の生活の中で無意識に行われているもので，身近なものであると言える。テレビや店頭で流れる BGM，風や波などの自然からなる音, 空調の音や人間の呼吸する音, 生きている中で「音」は無限に存在し，生活の中に溢れており，人は“無意識”に「聴く」という行動をしている。また，インターネットの普及に伴い，様々なサブスクリプションや音楽サイトを通して，簡単に音楽を聴くことができる現状から，生徒達は JPOP や KPOP など，一部の音楽を好んで聴いている印象もある。

しかしそれらは，音楽の授業における「聴く」こととは異なる。音楽の授業における「聴くこと」

佐賀大学大学院学校教育学研究科・学生

は，“耳から音を捉える”という聴覚的な意味を持つだけではなく，指導事項にもある通り，「自分なりに考え，音楽のよさや美しさを味わって聴くこと」が求められている(文部科学省，2017)。曲や演奏をなんとなく聴くのではなく，根拠を持って評価したり，曲想や音楽の構造との関わりを理解したり，これらの活動を持って鑑賞の授業を行わなければならない。そのため，日常生活における無意識的に「聴く」ことや，なんとなく「いい曲だな。」「好きだな。」と思うような「聴く」行為とは異なるため，音楽の授業で行われる「聴く」ことに対しギャップを感じ，難しさを覚える生徒は多くいると考えられる。

そして，音楽科学習指導要領の以下の部分に示されている，音楽の鑑賞における聴くことでは，「ただ聴いて漠然と感想を述べるのではなく，音楽によって喚起されたイメージや感情を自分なりに言葉で言い表したり書き表したりして，音楽を評価する活動が行われること」が求められている。音楽のよさや美しさなどについて，言葉で表現し他者と伝え合い，論じ合うことが音楽科における「批評」と示し，根拠を持って伝え合うことが豊かな鑑賞の授業と考えられる(文部科学省，2017)。

また，鑑賞の授業における「聴く」ことについて「知覚」「感受」という言葉で整理されている。「知覚」「感受」の理解について，佐賀県教育センターでは以下のような図で示されている(図 3)。この図の整理によると「知覚」と「感受」は共に関わり合っており，生徒が「知覚」「感受」を意識的に行っていき，それらを言葉にして伝え合う中で，新たな自分なりの価値を持ち，音楽を深く聴き味わうことに繋がっていくと示している。日常生活と音楽の授業における「聴く」ことのギャップは，この「知覚」「感受」が要因として考えられ，生徒達にとってはハードルが高く，難しく感じる場面が多いのではないかと考えられる。

1-2 中学校音楽科の授業における生徒の「多様な音楽経験」

音楽科の授業における学習活動に対する困難さについて，音楽経験の違いによる生徒の持っている知識や経験・学習の方法の違い・異なる聴き方，がみえてきた。

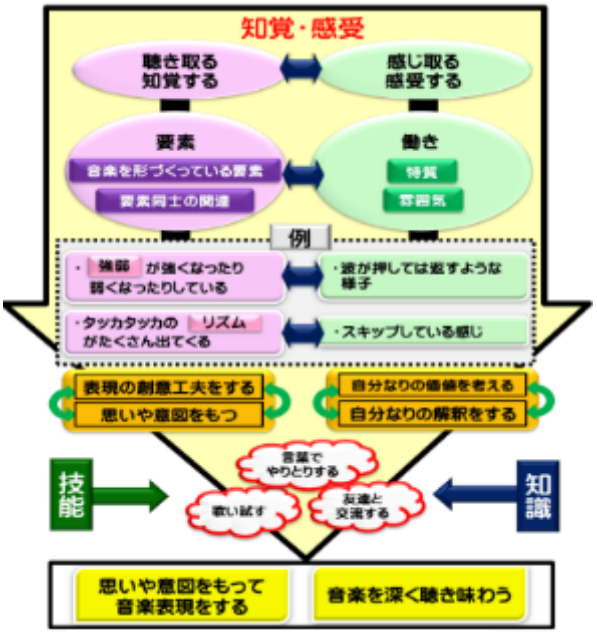


図 1　知覚・感受について
(佐賀県教育センター，2015)

(1)異なる音楽経験による知識・技能について

生徒が事前に持っている“知識・技能”が異なることである。「楽譜を読むこと」を例にして見ていくと，クラスの生徒全員が“楽譜を自立的に読むことができる”というクラスは，非常に稀であり，生徒が学習前に持っている知識・技能が異なることが分かる。特に中学校音楽科に関してはこの“知識・技能”に違いが出ることは珍しくない。それは，異なるいくつかの小学校でそれぞれ違う音楽科の授業を経験してきた生徒達が中学校で集まることが考えられる。指導項目や目標について学習指導要領で統一されてはいるものの，情操教育としての側面も担っている教科としての性質上，他の科目に比べると指導方法は幅広く，指導教員による授業内容の差が出やすいことが考えられる。小川(2001)が「音楽の指導を行うために教師は，常に自分が音楽とどのように関わっているのかを生徒の前に明らかにしなければならない」と示すように，音楽科で指導をするうえで“教師の持つ音楽の価値観”が生徒にとって最も身近な音楽の価

値観であり，教師自身が持つ“音楽の世界”の中で，生徒は音楽経験を積んでいく。そのため，音楽科の教員自体の専門性が異なったり，学んだ過程が異なったりするからこそ，教師の力量や経験によって指導方法・学習の深まり違いがあると考えられる。しかし，中には過去に習い事や部活動での音楽経験がある，音楽を好き・得意だと感じている生徒もいる。そこで，どちらかだけに偏った授業を行ってしまうと，どちらかが取り組みにくい学習活動になってしまうことになり，音楽の学習に対しての意欲を低下させてしまうという現状が生まれる。よって，多様な音楽経験による異なる知識・技能に配慮する必要があると考える。

(2)聴き方の違い

音楽科の授業の「聴く」とは，日常生活における「聴く」ことは異なり，そのギャップに困難さがあることが推測できると先述している。

加えて，生徒全員が同じ部分を聴いていたとしても，全員が違う感想を持ったり，どのように音楽を捉えたりするのか，生徒によって「聴き方が異なる」ことも音楽の学習活動においてハードルとなることが推測される。その要因として，“自分なりの音楽への価値観の違い”とも表すことができる。人はそれぞれに生きていく中で様々な価値観を形成し積み重ねていく。音楽においても同様であり，多様な価値観が存在している。この価値観の違いの要因の一つとして「音楽経験」が考えられる。異なる音楽経験があるために，形成してきたその生徒の価値観はそれぞれにあり,「聴き方の違い」に繋がっているのだと考えられる。また，(1)でも述べたように，学校の音楽の授業以外の場の習い事や部活動等の経験を持つ生徒や・音楽を愛好して日ごろから音楽に触れている生徒などは，音楽を聴くこと・聴いて感想を伝え合ったり表現したりすることや音楽について考えること対して，音楽経験をしていない生徒よりも比較的容易に行うことができるだろう。それは，音楽経験を積み重ねることで，それぞれの“自分なりの音楽への価値観”を身に付けている結果であるといえる。

この「音楽の聴き方」について，人々の価値観の違いに岡田(2009)は，「音楽評論家であるパウル・ベッカーは『芸術(音楽)体験』において，人はあらかじめ自分の中にあるものを再確認しているだけである。つまり人間は，自分の中に内なる図書館を持ち，どのような環境で育ち・どんな価値観に触れてきたかによって聴き方が異なる。一見新しく見えるものでも，実はこれまで意識されていなかったものに焦点が当たっただけなのである。」と示している。

これらのことから，誰もが安心して音楽の学習活動に取り組むためには，生徒の音楽経験音の違い，つまり「多様な音楽経験」を知り，生徒が実際にどのような知識・技能を持っているのか，どのような観点で音楽を聴いているのかについて把握することが必要であると考えられる。

1-3 音楽科の指導方法の多様性と「ユニバーサルデザイン」

吉田(2020)が,「生徒の音楽に対する興味・関心・意欲を高めるために，課題解決型学習，教材の精選，学習形態，評価方法など，教師の指導計画上の工夫が必要である。」と示すように，指導上の工夫・配慮に関する観点は音楽科の学習活動にとって重要であることがわかる。

生徒の「多様な音楽経験」，教員による「多様な指導方法」,音楽の授業に参加する人による様々な音楽に対する価値観や見方・考え方が音楽の授業に生かされ，誰でも安心して参加できる鑑賞の授業を行うために，ユニバーサルデザインの視点を意識していくことが有効なのではないかと考えられるため，本項では，教育②おけるユニバーサルデザインがどのようなものか整理する。

(1)「ユニバーサルデザイン(UD)」とは

現在の日本の教育現場では,「ユニバーサルデザイン(以下，UD)」の視点で授業実践・支援を行っていくことについての関心が高まっている。松戸(2022)は,「この UD における“幅広く多様な概念”や，“誰一人として取り残さない”という持続可能な開発目標(SGDs)の観点も踏まえ，教育においても UD が有用であり，教育を UD の視点整理し，

授業実践を行っていくことへの関心が高まっている。」と示している。

そもそも「UD」とは本来，住宅・商業施設・公共施設等といった建築的な視点で考えられている概念であり，ノースカロライナ州立大学のロナルド・メイスによって提唱された。この UD は，それまでに提唱されていた，“バリアを無くす”という障害者や高齢者を対象とした「バリアフリー」の考え方とは異なり，“誰にとっても使いやすい，アクセスしやすいデザイン”という概念であり，以下の 7 原則に整理されている。

原則 1：Equitable Use－公平な使用。
原則 2：Flexibility in Use－使用における柔軟性。
原則 3：Simple and Intuitive Use－シンプルで直観的な使用。
原則 4：Perceptible Information－認知性。
原則 5：Tolerance for Error－エラーへの寛容性。
原則 6：Low Physical Effort－低い労力。
原則 7：Size and Space for Approach and Use－アプローチと使用のために，
誰にでも適応できるサイズとスペースで。
(NC 州立大学・ユニバーサルデザインセンター，1997)

図 2　ユニバーサルデザインの 7 原則

これらの UD の発想が教育分野においても応用できると考えた米国の民間教育開発研究組織（The Center for Applied Special Technology， CAST）が，教育の UD 化についてのガイドラインを開発したことをはじめ，様々な教育の UD 化が提唱され広がってきている。

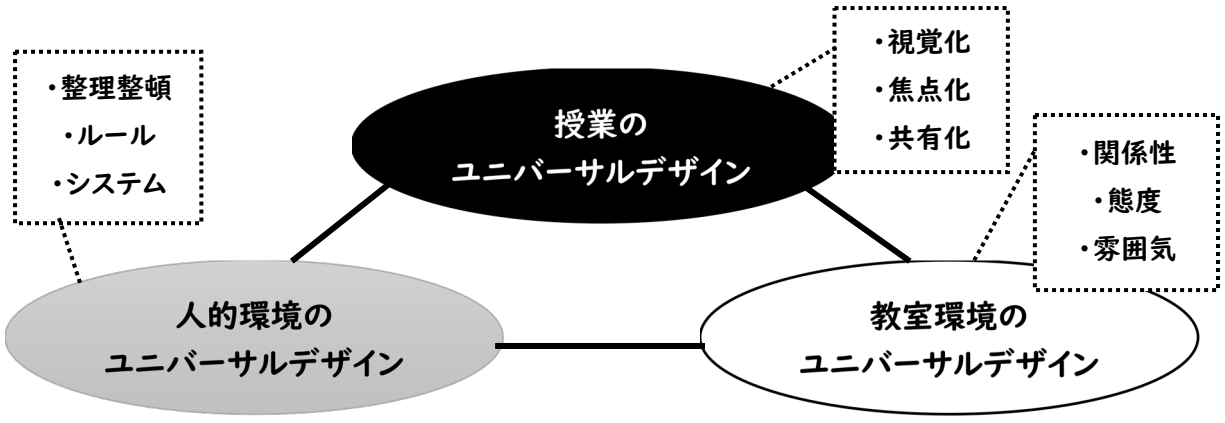
(2)「教育の UD」三つの柱について

「教育のユニバーサルデザイン(以下，教育の UD) 」とは,「特別な支援が必要な子も，そうでない子も含めて，通常学級におけるすべての子どもが楽しく学び『わかる・できる』ことを目指す授業デザイン」であり, 指導理念である(日本授業 UD 学会，2022) 。これらの指導理念から，教育の UD はインクルーシブ教育との結びつきも深いが，個別の支援を行うことではなく，合理的配慮とその基礎となる環境整備等，すべての生徒を対象とした工夫・配慮であり，通常の学級においても様々な実践が行われようとしている。集団で学習する生徒達へ向けて，学力の優劣や発達障害の有無に関わらず，すべての子どもが学びあうために，特別支援学級のみならず通常学級の授業でも工夫・配慮していくことが求められているのである。

この「教育の UD」は，阿部(2019)によって 3 つの視点で整理されている(図 3)。一つ目の「教室環境のユニバーサルデザイン」では，黒板回りの刺激物を減らしたり，学習道具の収納場所を明確化したりすることで，学習に集中できるための環境づくりに焦点を当てた UD である。二つ目の「人的環境のユニバーサルデザイン」では，学級のルール作りをはじめとして，子ども同士の相互理解のための工夫し，安心して学習に取り組むことができる人的環境を整備することに焦点を当てている。三つ目の「授業づくりのユニバーサルデザイン」では，授業計画において視覚化・焦点化・共有化の視点を踏まえて授業づくりを行っていく。これらの 3 つの視点は相互的に関わり合って影響し合いながらどれも切り離せない視点であると示している。

特に，生徒が安心して学習活動に取り組むためには「人的環境の UD」が重要である。それは音楽の学習に取り組む際に引き起こされる「心理的ハードル」に対する配慮も必要になってくるのではないかと考えるからである。

実践校や過去の実習校の一部の生徒へインタビューをすると，音楽をすることに対して，生徒はそれぞれの意見を持っていたが，その中でも，音楽の授業中に人前で演奏することや，聴き取ったことや感じ取ったこと等の音楽に対する自分の考えを人に伝えること，に対して「恥ずかしい」「できればやりたくない」という声が多くあった。ここで生徒の言葉にもあった「恥」について，樋口(2002)が示す「恥」発生メカニズムの測定項目について見てみると，多様な「恥」を引き起こすことを検討し示している。音楽科の授業における「人前で演奏することの恥ずかしさ」などは，まさに公恥状況における「社会的評価懸念」や「自己イ



(阿部.2019『人的環境のユニバーサルデザイン』p11，p149 より，筆者が作成)

図 3　教育のユニバーサルデザイン

メージ不一致」などが発生因として考えられる。そして，これらのような心理面が，音楽科の学習に取り組む際のハードルとなり，授業への意欲を抑制したり，すべての生徒の「わかる・できる」を阻害したりしているのだと考察する。

また, 人的環境の UD の視点に着目することで, 安心して学ぶことができる・わからないことやできないことに正直になれる学習環境を意識することができる。知識・技能を高める・間違いを減らすのではなく，互いに聴き合い・共感し合うような集団的肯定感を育むことや，できないことを自ら援助要請できることなど，安心できる風土づくりが大切になると考える。本来人的環境の UD に取り組む際には，学級経営などを主体としながら長期的に取り組んでいく方がより効果的であるかと考えられるが，本研究のような短期間の実践の中でも，なるべく“人的環境”に配慮した学習活動を検討したり，常に教師の声掛けを慎重に行っていったりしながら，生徒が音楽の授業に安心して参加できるような工夫や配慮を取り入れていくことが必要であると考える。

1-5 本研究の目的

本研究では中学校音楽科の授業における生徒の「多様な音楽経験」，教師による「多様な指導方法」の実態を鑑み，教育の UD の 3 つの柱を意識した。授業実践を計画して行っていくことで，どのような生徒にとっても安心して参加でき，多様な音楽の価値観が生きてくるような鑑賞の授業を目指し，多様な音楽経験によって生まれる知識・技能の差や聴き方の違いに対して工夫・配慮を行っていく。

2.【研究Ⅰ】音楽の鑑賞の授業における，実践校の実態把握のためのアンケート調査

2-1　目的

実践校における鑑賞について生徒の実態を調査する。実施日程は 2022 年 4 月，対象者は，中規模公立中学校の第 1 学年，M 組(35 名)である。この事前実態調査を踏まえ，授業実践に活かしていくことを目的とする。

2-2 研究方法　―〈質問 1〉アンケート調査

アンケート調査の質問 1 では，鑑賞の授業で行われる学習活動に，どのような思いや考えを持っているかを問う質問を行った(表 1)。

―〈質問 2〉アンケート調査

〔質問 2〕では，具体的な感情面に着目したアンケート調査を行った(図 4)。質問 2 のアンケート結果では複数回答有りで，選択肢の個数をカウントしている(表 2)。

表 2　アンケート調査　〈質問１〉―結果

〈質問 1〉　次の①～⑫の音楽の授業における学習活動について，1～5 から選び，あなたの思いや考えに最も近い数字に〇をつけてください。						
あなたの思いや考え						
好きではない ⇔ ふつう ⇔ とても好き 1　2　3　4　5						
No.	**音楽の授業における学習活動**	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**
①	様々な音楽を聴いたり，映像で観たりすること。	0%	5%	23%	26%	46%
②	楽譜を見たり読んだりしながら，音楽を聴くこと。	3%	20%	31%	20%	26%
③	音楽を聴きながら，音楽の特徴を聴き取ること。 （音楽の特徴とは，速度・強弱・リズム・音色など。）	6%	26%	31%	20%	17%
④	音楽を聴いて，おもしろい・ワクワクする・暗い感じがする…などの感情をもつこと。	3%	9%	34%	20%	34%
⑤	音楽から「聴き取った」「感じ取った」ことを言葉や文章で書くこと。	14%	29%	23%	20%	14%
⑥	音楽の特徴や音楽を聴いて感じたことを，ペアやグループ，クラスの友達と伝え合うこと。	20%	34%	14%	20%	12%
⑦	音楽や楽器についてくわしく学ぶこと。	6%	23%	37%	14%	20%

表 1　アンケート調査　〈質問２〉―結果

No	音楽の授業における学習活動	1	2	3	4	5	6
[1]	音楽を聴きながら音楽の特徴についてノートやワークシートに言葉や文章で書くこと。	4	5	15	13	4	
[2]	音楽を聴いて感じ取ったことを、ノートやワークシートに言葉や文章で書くこと。	4	9	9	16	3	0
[3]	クラスのみんなの前で、音楽についての思いや考えを伝えたり発表したり、友達の音楽についての思いや考えを知ったりすること。	4	6	11	13	6	1
[4]	あなたは、楽譜（音符や休符、音楽記号、階名〈ドレミファソラシド〉など。）を読むことができますか。	8	6	8	9	9	
[5]	あなたは、楽譜（音符や休符、音楽記号、階名〈ドレミファソラシド〉など）を読むことについて、どう感じていますか。	4	5	8	15	3	1

〔質問2〕 次の[1]～[5]の質問について、あなたの思いや考えに最も近いものを選び、1～6の番号に〇をつけてください。（迷ったらいくつ選んでもいいです。）

[1]音楽を聴きながら音楽の特徴についてノートやワークシートに言葉や文章で書くこと。
〔音楽の特徴（とくちょう）とは、(例)：速度・強弱・リズム・音色などです。〕
1 得意である ・ とても好き ・ とても興味がある ・ とてもやってみたい ・ さらに上達したい
2 興味がある ・ おもしろい ・ わくわくする ・ 好き ・ ためになる ・ 役に立つ
3 どちらかというと好き ・ 今よりできるようになりたい ・ 上手になりたい
4 あまりできない ・ 苦手 ・ できなくて困っている
5 あまり興味や関心がない ・ できなくても困っていない

[2]音楽を聴いて感じ取ったことを、ノートやワークシートに言葉や文章で書くこと。
〔音楽を聴いて、おもしろい・ワクワクする・暗い感じがする…などの感情をもつことです。〕
1 得意である ・ とても好き ・ とても興味がある ・ とてもやってみたい ・ さらに上達したい
2 興味がある ・ おもしろい ・ わくわくする ・ 好き ・ ためになる ・ 役に立つ
3 どちらかというと好き ・ 今よりできるようになりたい ・ 上手になりたい
4 あまりできない ・ 苦手 ・ できなくて困っている
5 あまり興味や関心がない ・ できなくても困っていない　6 その他(　　)

[3]クラスのみんなの前で、音楽についての思いや考えを伝えたり発表したり、友達の音楽についての思いや考えを知ったりすること。
1 得意である ・ とても好き ・ とても興味がある ・ とてもやってみたい ・ さらに上達したい
2 興味がある ・ おもしろい ・ わくわくする ・ 好き ・ ためになる ・ 役に立つ
3 どちらかというと好き ・ 今よりできるようになりたい ・ 上手になりたい
4 あまりできない ・ 苦手 ・ できなくて困っている
5 あまり興味や関心がない ・ できなくても困っていない　6 その他(　　)

[4]あなたは、楽譜（音符や休符、音楽記号、階名〈ドレミファソラシド〉など。）を読むことができますか。
1 すぐに読める ・ すらすら読める ・ 得意である
2 時間をかけて一つ一つ調べたり考えたりすれば読める
3 一部なら読める
4 あまり読めない ・ 苦手である ・ 不得意である
5 読めない※3を選んだ人は、①～③から当てはまるものを選んでください。
（いくつ選んでもいいです。）
① 音符や休符は読める ② 音楽記号は読める ③ 階名〈ドレミファソラシド〉は読める

[5]あなたは、楽譜（音符や休符、音楽記号、階名〈ドレミファソラシド〉など）を読むことについて、どう感じていますか。
1 得意である ・ とても好き ・ とても興味がある ・ とてもやってみたい ・ さらに上達したい
2 興味がある ・ おもしろい ・ わくわくする ・ 好き ・ ためになる ・ 役に立つ
3 どちらかというと好き ・ 今よりできるようになりたい ・ 読めるようになりたい
4 あまりできない ・ 苦手 ・ 読めなくて困っている
5 あまり興味や関心がない ・ 読めなくても困っていない6 その他(　　)

図 4　アンケート調査　〈質問 2〉―質問項目

(1)〔質問 1〕について

質問 1－①の結果を見ると，4 以上を選んだ生徒が多く，合わせると 72%であった。この結果から，生徒は音楽自体を聴く・映像を見る，ということに関して比較的好意的であることが分かる。ここで，質問 1－②では“楽譜を見ながら”という条件が加わった時, 4 以上を選んだ生徒が, 46%であった。質問 1－①と比較してみると 4 以上を選んだ生徒は減少し，2 や 3 を選んだ生徒が多くなっていることが分かる。“楽譜を読むこと”という学習活動が加わることで“好き”である感情が減り，生徒はなんらかの思いを感じていることが

うかがえた。

質問 1－③では，鑑賞における“知覚”することについて，質問 1－④では鑑賞における“感受”することについて質問した。③では 4 以上を選んだ生徒が 37%,④では 4 以上を選んだ生徒が 54%であった。この結果から，“知覚”よりも“感受”することの方が好きであると答えた生徒の割合が多いことが分かった。音楽を形づくっている要素を聴き取る“知覚”では，前提として音楽的な知識が必要であることを懸念していた。また，小学校の異なる音楽経験，学外の習いごとなど，これらにより音楽を“知覚”“感受”することは好き・あまり好きではないに差が出てたと考えられる。

質問 1－⑤の結果では，4 以上を選んだ生徒は 34%であった。反対に 2 以下を選んだ生徒が 43%であり，4 以上を選んだ生徒の割合を上回った。この結果により,言葉や文章にすることに関して,“好きではない”,また,なんらかの思いや考えを持っている生徒がいることが分かった。鑑賞の授業が～学習活動になっていることが推測される結果であった。言葉や文章にすることの難しさや,経験の有無により得意・不得意な生徒が分かれる学習活動なのではないかと考えられる。しかし,両クラス共に“好きだ”と回答している生徒も一定数いるため，この好きだと回答している生徒が活躍し,”グループ活動などを通して共有しながら学び合っていく”ことができるのではないかと考える。

質問 1－⑥では,“好きではない”という 1～2 を選択した生徒が半数を超え，割合としては高くなった。鑑賞においては，音楽に対して生徒一人ひとりの異なる聴き方・感じ方を多様な音楽の価値観とし，互いに認め合ったり，良さを感じ合えたりするような学習活動を行う必要が求められている。そのため，生徒があまり好きではないという発表という学習活動を，どのようにハードルを減らしていくか，好きでない生徒も好きな生徒も共有をしやすい活動を考えていく必要があると考える

質問 1－⑦質問では，4 以上の生徒が 34%，ふつうである，3 を選択した生徒が 37%，2 以下の生徒が 29%と一番多いのが“ふつう”だと感じている生徒であった。

①から⑦までを通して結果から得られた考察をまとめると，音楽を聴くことに関して好きという気持ちを持つ生徒が多いこと，元々持っている思いや考えは好意的であるが，“楽譜を読む”“聴き取ったことを言葉にして書く”等の学習活動になると“好きではない”という回答になることがわかった。特に，楽譜を見る・言葉で表現する，では知識・技能を要する学習活動は，生徒によって思いや考えが異なることがうかがえる結果であった。アンケート調査で分かった「音楽を聴くこと自体は好き」「映像を観ることは好き」であるという結果を生かしながら，授業実践において特に配慮していく点が明確になった。

またこの結果の中でも，特に“好きではない”の割合が高かった質問 1－⑥の結果を見ると，この「人前で発表する」という行為自体に何らかの心理的なハードルや思いがあるのではないかと推測されるため，質問 2 の結果も踏まえて工夫・配慮を取り入れていく必要があると考える。

(2)〔質問 2〕について

質問 2―①では，生徒が 3 を選択した回数が 15 件を超え，次に 4 を選択した回数が 13 件であった。どちらかというと好き・今よりも出来るようになりたい，という意欲的な生徒も居ながら，やはりワークシートに言葉で書くことについて，やはり，あまりできない・苦手である，とできないことで苦手感や困り感を持っていることがわかる。この質問 2－②では，4 を選択している生徒が 16 件と最も多く，次に多いのが 2 と 3 を選択した回数，9 件である。質問 2－①②比べると比較的意欲的な生徒が多い。次に 2・3 を選択した回数が多い件について,「おもしろい」・「やってみたい」,等,選択肢をピンポイントに選び，この学習活動に関して意欲を示している生徒もいた。

また中には，繋げて読むと文章になるような,複数回答をしている生徒もいた(図 7)。質問 2－①・

②を踏まえると，“知覚”“感受”について，どちらかというと感受の方が意欲的であることが見えてきた。そのため，学習活動の順番として，“感受”からの方が取り組みやすく，生徒への工夫・配慮として適切であると考える。

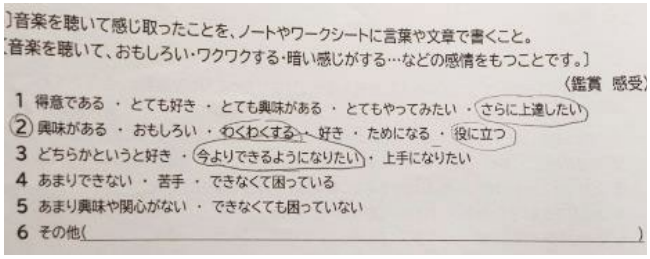

]音楽を聴いて感じ取ったことを、ノートやワークシートに言葉や文章で書くこと。
[音楽を聴いて、おもしろい・ワクワクする・暗い感じがする…などの感情をもつことです。]
（鑑賞　感受）
1 得意である ・ とても好き ・ とても興味がある ・ とてもやってみたい ・ さらに上達したい
② 興味がある ・ おもしろい ・ わくわくする ・ 好き ・ ためになる ・ 役に立つ
3 どちらかというと好き ・ 今よりできるようになりたい ・ 上手になりたい
4 あまりできない ・ 苦手 ・ できなくて困っている
5 あまり興味や関心がない ・ できなくても困っていない
6 その他（　　）

図 5　質問 2－⑥　生徒の複数回答

質問 2－③では，1 から 3 を選択した回数が 22 件，4 から 6 を選択した生徒が 20 件と，約半数ずつに分かれる結果であった。また，質問 2―④の楽譜を読むことに関して，4・5 と回答した回数が 18 件であり，楽譜を読めない生徒が多くいる事がわかった。また，質問 2－⑤に関しても 4 を選択した回数が 15 回となっており，楽譜に関して苦手感を持っている生徒は多いことがわかった。

学習形態の工夫・配慮として，「発表の方法」「楽譜が読めても読めなくても取り組める方法」であること着目しながら学習を計画していく必要があることがわかった。これらのアンケート結果を踏まえて，多様な音楽経験に関わらずに授業の中で生徒が安心して授業に取り組めるよう，実践を計画していく。

3.【研究Ⅱ】授業実践-ヴィヴァルディ作曲「四季」

3-1 目的

生徒が安心して鑑賞の授業に取り組むために，「音楽の聴き方」の違いや「音楽経験の差」に着目していく。その中で，誰もが学習活動に取り組みやすいというユニバーサルデザインの視点を取り入れた工夫や配を考え，実践に取り組む。

3-2 研究方法

(1)授業実践計画と，授業作成の概要。

本研究で取り扱う鑑賞教材は，アントニオ・ヴィヴァルディ作曲の「四季」の中から，『春』の第 1 楽章である。『四季』は，「春」・「夏」・「秋」・「冬」の 4 曲からなり，「春」の第 1 楽章では，主題(リトルネッロ)が繰返し間に演奏される「リトルネッロ形式」である。ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロ・コントラバスの弦楽器とチェンバロ等が主に使用される曲で，「四季」には，それぞれ「ソネット」という 14 行からなる詩が添えられている。詩と曲想の関わりが深い曲であるため，詩と音楽という両面から情景を思い浮かべやすく，評論をする際に言葉にしやすい作品であるため，本教材を取り上げた。

鑑賞の授業が行われる際に，多様な音楽経験を持つ生徒に予想されるハードルについて，具体的にみていくと，<u>(1)音楽に関する知識・技能の差</u>，で懸念される点は，①楽譜が読めないこと，②楽器や音の判別ができないこと，③言葉で表現することの難しさ等が考えられる。<u>(2)聴き方の違い</u>，で懸念される点は，①生徒が着目する点が異なること，②生徒同士の意志疎通を図る事が難しくなること等が考えられる。音楽科の学習により安心して取り組み，多様な鑑賞の授業が行われるために以下のような工夫・配慮を行っていく。対象学年は 1 年 M 組 N 組の 2 クラスで実践を行う。

(2)授業計画における工夫・配慮

<u>〇授業の構成についての工夫</u>

本授業においては，1 時間目には，音楽を「聴き取る(知覚)」「感じ取る(感受)」ことについて学習し，鑑賞の学習の基礎を身に付けることができるようにした。楽器音色の特徴，楽器の構造等を確認しながら聴き取り，感じたことを共有する活動を通じて，一人ひとりの「音楽の感じ方」の違いに気付かせることをねらいとした。2 時間目には「春」だけではなく「夏」「秋」「冬」にも触れることで，詩と音楽が表す情景を思い浮かべながら，曲想と音楽の構造を意識する。その後，音楽を聴き，個人やグループで話し合いながら，「音楽に合うソネット」を考えていく学習活動を行うなう。３時間目には「知覚」と「感受」は関わり合っているということに気づくことができること

をねらいとする。ソネットと音楽の関わりや，楽器の特徴を聴き取ることとその働きから感じ取ることの学習活動を通じて，音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に鑑賞の学習活動に取り組むことができるように促す。この時間に行う「知覚」と「感受」の関連を理解することの難しさを少しでも減らすため，「知覚」「感受」を行うための準備として，まずはこの音楽を作っている楽器の種類・音色・ソネットの役割を 1－2 時間目に学ぶこととした。こうして何を「知覚」「感受」すればよいか，どんな言葉を用いてワークシートを書いていけばよいかの知識面を補ってから，実際に聴いたり書いたりする学習活動に取り組むことができるような構成を取り入れた。

3-2-(3)教具の工夫・配慮

○色や文字に工夫・配慮したスライド

今回の授業実践では電子黒板を活用し指導を行った。スライドを用いることで，視覚的な補助，学習をスムーズに進められるようになることを目指した。スライドは基本，UD フォントを使用した。

背景と色の組み合わせを配慮するに当たっては，東京都が発行するカラーユニバーサルデザインガイドラインを参考にした。カラーユニバーサルの目的は，色覚に配慮して情報がなるべくすべての人に性格に伝わるように，利用者の視点に立ってデザインすることである。

また，今回の鑑賞教材では，ソネットという 14 行からなる詩が添えられている音楽であった。本教材として聴いた「春」は 5 つのソネットがあり，鑑賞するときにはソネット 1 つ分毎に分けて鑑賞した。そのため，それぞれのソネットで色を変えてスライドを作成した(図 8)

この色分けにより，実際に鑑賞をする際に，“今はどのソネットの部分を聴いているのか”が示しやすくなった。音楽の中にも使われている楽器や調性の違い等，かなりはっきりとした相違が分かる曲ではあるが，まず音楽を聴くだけで気づかせるというのは難易度が高い。そのため，色分けをすることで視覚的に“音楽の違い”を感じやすくすることをねらい取り入れることにした。

また，色を分けた理由は後に学ぶ「リトルネッロ形式」にもある。リトルネッロ形式は，A と同じような旋律が B 以降でも各部分の間や最後に合奏で現れる構成のことである。それぞれのソネットが色分けされていることで，A に似た旋律が間に繰り返されることを視覚的に確かめることができる。音を聴いて確かめることはもちろんだが，最初から音を聴いて聞き分けることが難しい場合，リトルネッロ形式を納得できる生徒そそうでない生徒が出てくる。そのため，視覚的補助として色分けをすることで，何を意識して聴いて確かめればよいか，を示すことができた(図 9 赤枠内)。

図 6　色を工夫・配慮したスライド

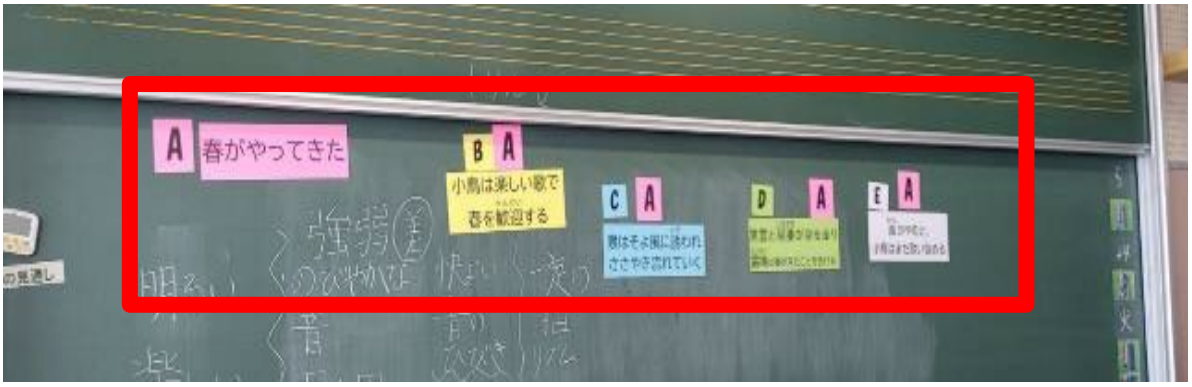


図 7　リトルネッロ形式のための色分け

黒板にも同様の色の掲示物を作成し，使用した。

○写真を効果的に用いたスライドの工夫・配慮

楽器の説明をする際には，実際の写真を用いて，どのような楽器を使って演奏しているのか，どのような大きさの楽器からどのような音が鳴っているのか，そして弦楽器の種類や違いを学ぶために“楽器の大きさを比較する写真”を用いた教材を作成した(図 10)。言葉だけで弦楽器について理解を促すのではなく，電子黒板のスライドで，写真を用いた学習を行うことで，弦の部分を指で拡大しながら示すことが可能であり教科書で各々確認するのではなく，学級のみんなと共に確認しながら，楽器への理解を深めることができると考え取り入れた。

また，図 11 のように，重要な単語のみをスライド 1 枚に大きく表示することで，より強調して生徒に伝えられるよう心掛けた(図 11)。重要な言葉や強調したい言葉のみをスライドで示して情報量を減らすことで，生徒の印象に残りやすく，情報が混雑しないよう心掛けた。

また，学習指導要領によると，音楽をより深く聴き味わうためには，人間の基盤である風土，文化や歴史，伝統といった音楽の背景にも目をむける必要があることが示されている。これらの影響を受けて音楽が成立していること，人間と生活と音楽が関わり合いながら生まれる音楽文化に触れ，多様性を感じ取ったり理解したりすることは音楽に対する価値観や視野の拡大を図るものである。(文部科学省，2018)。

図 8　写真を用いたスライド①

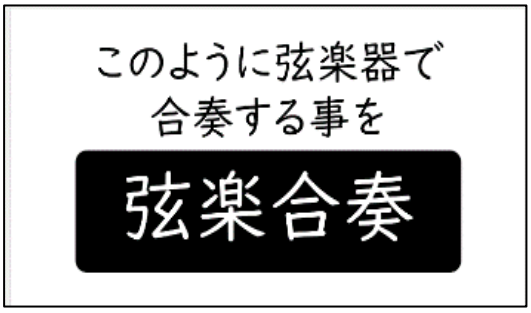


図 9　1つの情報を強調するスライド

これらを踏まえて，鑑賞をする際にも，実際にどのような土地でこの音楽が生まれているのか，作曲者の生まれた土地の写真をスライドで提示することや，同時代に日本はどのような時代背景にあったのか等も見せるように工夫した(図 12)。

図 10　写真を用いたスライド②

加えて,「春」をより一層聴き味わうために,「春」の他にも「夏」「秋」「冬」の鑑賞も一部行った。それぞれの季節によって変化するベネツィアの写真を用いることで，情景を思い浮かべやすくなるように工夫・配慮した。(図 13)

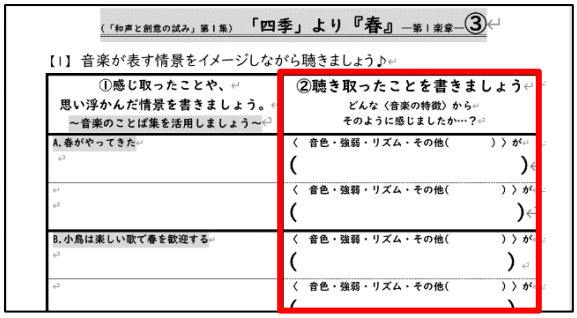
図 11　写真を用いたスライド③

○ワークシート作成時の工夫・配慮

ワークシートを作成する際に配慮した点は，1時間目の授業が 1 枚で完結できることである。教材が多く，教科書や音楽学習ノート，資料集，プリント等，様々な教材を行き来する授業中には，教師の 1 度の指示だけでは適切な教材を開けず，授業に遅れてしまう生徒が出てくることも少なくない。または，別の教材に移る間の時間が余計にかかってしまい，生徒同士で「今どこ？」と聴き合っている間に，次の指示を聞き逃してしまう等を防ぐために工夫を行った。ライドやデジタル教科書で情報を補いながら，ワークシート 1 枚でなるべく完結できることを心掛けてワークシートを作成した。

○選択式のワークシートについての工夫配慮

二つ目にワークシートを作成する際に心掛けた点は，「知覚」「感受」を言葉にしやすいワークシートづくりである。「知覚」したことを言葉で表すことはが容易ではなく，また音楽の知識面が豊富ではない生徒ほど言葉に表しにくい部分であることが懸念されていた。そこで平松・山中(2019)は，言葉での表現を求める際に,「音楽の証拠を見つけよう」と称し，速度・音色・強弱・旋律・リズムの 5 観点を選択式のワークシートを用いて生徒が言葉にしやすいようにしていた。他にも，多くの先行事例では，“選択式ワークシート”を用いることで生徒の取り組みにくさの軽減を目指す検討がされている。それらを参考にしながら，教材の「春」の特徴を踏まえ，音楽を形づくっている要素の中でも知覚しやすいものを選択肢とし，ワークシートを以下の様に作成した(図 14，赤枠部分)。


（「和声と創意の試み」第１集）　「四季」より『春』―第１楽章―③

【１】音楽が表す情景をイメージしながら聴きましょう♪

①感じ取ったことや、思い浮かんだ情景を書きましょう。～音楽のことば集を活用しましょう～	②聴き取ったことを書きましょう どんな〈音楽の特徴〉から そのように感じましたか…？
A. 春がやってきた	〈　音色・強弱・リズム・その他(　　)〉が ( )
	〈　音色・強弱・リズム・その他(　　)〉が ( )
B. 小鳥は楽しい歌で春を歓迎する	〈　音色・強弱・リズム・その他(　　)〉が ( )
	〈　音色・強弱・リズム・その他(　　)〉が ( )

図 12 知覚・感受のワークシート

○ワークシートの知覚・感受の順番

作成したワークシートでは，敢えて「感受」→「知覚」の順番で記入することをねらい，左側に「感受」右側に「知覚」の形で作成している。これは，佐賀県小中学校音楽教育研究会が発行している「佐賀県版　音楽学習ノート 1 年」を参考に作成している。敢えてこの順番を選択した理由は，鑑賞の授業を行うにあたって「知覚」「感受」は互いに関わり合うことで学ぶが深まると考えるからである。

しかし，生徒にとって「知覚」「感受」を言葉で書き表すことは容易ではなく，特に「知覚」に関しては音楽を形づくっている要素に着目して聴き取り，それを言葉にして書き表さなければならない点において特に難しさが考えられた。そのため，この「知覚」「感受」の学習活動の順番において，どちらから取り組ませるのかを検討することは，生徒の取り組みやすさを高めるために，非常に重要な点だと考える。

そこで佐賀県小中学校音楽教育研究会が作成している「佐賀県版　音楽学習ノート」を参考にし，を得て，「知覚」「感受」の関係性について「どのような感じの音楽でしたか(感受)」→「それはなぜですか(知覚)」という考え方に基づいたワークシートを作成した。

このように自身の感じたことに向き合うことで自分の考えに価値を見出し，またその考えの根拠を探っていくという思考は，今後のグループ活動での意見交換を行う場面でも生きてくる。自分の音楽に対する価値を，根拠を持って説明することができたとき，互いの音楽に対する想いへの理解も深まり，より活発な鑑賞における批評が行われることが期待できると考える。

3-2-(4)学習活動の工夫・配慮

○学習活動の工夫①―ソネットクイズ

本学習の 2 時間目にソネットを学習した際，ソネットが書かれたカードを配り，流れた音楽に合うソネットを選ぶという「クイズ形式」で考える学習を取り入れた。学習の流れは，まず，一つの音楽を聴く。次に，グループで音楽に合うソネットを話し合いながら，一つ選ぶ。最後に答え合わせをする，である。これらをソネット毎に繰り返しながら，第 1 楽章を全て聴く。

ソネット(詩)と音楽の関わりを探るために，題名と音楽の関係や，「春」「夏」「秋」「冬」と 4 曲で構成されていることを知って，学びの見通しを立てられるよう促す。この学習活動は 3～4 人のグループで行い，「どうしてこのソネットが合うか」の理由を話し合う場を設けた。

○学習活動の工夫・配慮②―スモールステップ化

学習を行っていくにあたり，学習活動をスモールステップ化した。

表 3　学習活動のスモールステップ化

①	個人	ワークシートを記入。 感受・知覚したことを 言葉で書き表す。
②	ペア	記入した内容を共有。 書き表したことをペアで伝え合い，相手の知覚・感受したこともメモする。
③	グループ	グループで共有し，考えをまとめる。 4 人グループをつくり，伝え合い，気づいたことをまとめる。
④	クラス全員	グループ全員で立ち，みんなでまとめた考えを発表する。

これはワークシートを個人で書いた後，自分の考えをクラスで共有する際に用いた。記入後に考えを共有する際，一人一人がクラス全員の前で，一人で発表するのでは，緊張したり，自分の考えに自信を持って発表出来なかったりする生徒もいるが，このように徐々に自分と他者の感じ方・聴き方の違いをしり，価値づけ，共有することで心理的ハードルを減らすことを考え取り入れた。

○学習活動の工夫　③―担当をつくる。

ソネットが 5 つあることを生かして，それぞれの班に一つ担当のソネットを与え，その一つのソネットについて感じたこと・聴き取ったことを共有して意見をまとめる活動を取り入れた。班の中だけでの学び合いではなく，クラス全体で思いや考えを共有できるよう，学び合う場が広がることをねらいとした。

表 4　担当をつくる学習活動の例

班名	担当するソネット
1・2 班	春がやってきた
3・4 班	小鳥は楽しい歌で春を歓迎する
5・6 班	泉はそよ風に誘われ， ささやき流れていく
7・8 班	黒雲と稲妻が空を走り， 雷鳴は春が来たことを告げる
9 班	嵐がやむと， 小鳥はまた歌い始める。

3-2-(5)教室環境の工夫・配慮

○スライドの工夫。

実践校の音楽室は，ひな壇の様な構造をしており，緩やかな 3 段ほどの段差がある音楽室であった。そのため，前の黒板やスライドを見る際に前の人の頭と重なってしまい全く見えない・立って背伸びをしないと板書が出来ない状況であった。この状況を踏まえ，スライドを作る際には，スライドの下部分に情報を詰め込まないよう工夫した。

第 1 回目の授業で使用したスライドには情報も多く，一番重要である本時のめあてが下部にきており，後ろの席の生徒には見えにくいスライドになっていた。第 1 回目のスライド(図 13)から改善し，第 2 回目(図 14)には必要な情報のみ簡潔にまとめ，スライドの上半分を主に使用する形にしたことでどの席に居ても見えやすくなるように心掛けた。

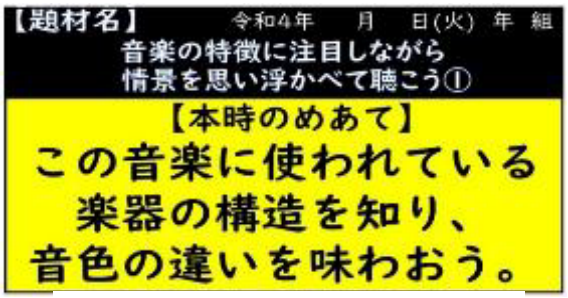


図 13 授業 第 1 回目 スライド

図 14　授業第 2 回目 スライド

○音楽室ならではの環境づくり

他にも，環境づくりとして，音楽の授業前には教材曲である「春」を BGM として流し，常に聴くことが出来るような環境を作っておくようにした。そうする事で，自然と「春」が耳に馴染み，聴きやすくなり，今まで気づくことができなかっ

た部分に気づくことができるようにする。また，音楽室に来たら音楽の学習をするという前時からの気持ちの切り替えや整理にもなるようにする。

○音楽を聴く時の声掛けの工夫・配慮。―話し方

話の“間”の取り方である。強調したい言葉や，音楽を流す前には一呼吸置き，活動を区切ることで次の活動に集中できるようにした(図 15)。その際に使用したスライドにもソネットを載せ，音と視覚的にソネットを意識できるようにした(図 16)。

＞「音楽を聴いて感じた事をワークシートに書きましょう。」
＞(間を取る。)
＞「春がやってきた。」
(～♪～　音楽を流す。)

図 15　音楽を流す前に気を付けた動作の例

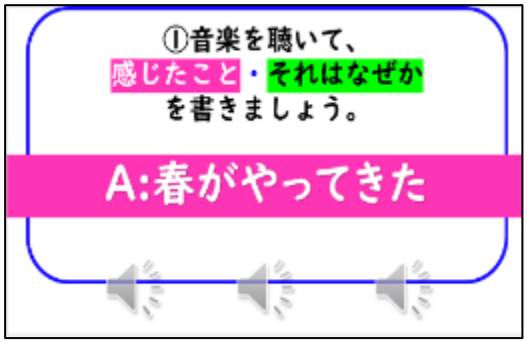


図 16　ソネットを載せたスライド

この取り組みでは,学習活動が流れてしまったり，生徒が授業の流れに遅れてしまったりしない様にすることを防ぐことを考えた。また，聴いてワークシートに書くときには曲間・曲を聴いた余韻の気持ちも大切にする。そうする事でより自分の考えと向き合い，学習にも集中できるようになると考えた。

○グループ活動の声掛けの工夫・配慮

ペア→グループ→全体で共有，と学習活動を行う際に,「グループで共有したことを，クラスで共有する」をゴールとすることをまず伝えて学習活動に入ることで，見通しを持って学習活動を行うことが出来る。そして，急に言われて発表するとなると感じられる心理的なハードルも，前もって予告されることで軽減できる。また，話し合いのグループ活動を行う際には，電子黒板のストップウォッチ機能を使って，視覚化しながら時間を区切って行った。

このように，時間の構造化は生徒にとって活動の充実度を左右する重要な視点であるといえる。見通しを持たせることで，目標に向かって集中して取り組めるようになることを期待し取り入れることにした。

3-3 結果と考察

生徒のワークシートの記入状況から結果と考察を行っていく。

○授業計画の工夫

本実践の鑑賞学習の中で，1・2 時間目に行った音楽に使われている楽器の種類・リトルネッロ形式について・ソネットについて・音楽を形づくっている要素について，等，学んだ知識面を生かした記述が多く見られた(図 17)。聴き所を学んでおくことで，聴き取ったこと・感じ取ったことを言葉にして書くことへの苦手感・難しさを軽減できたと考えられる。

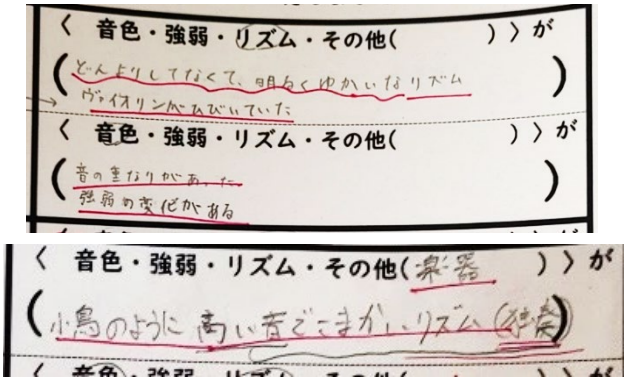


図 17　生徒の回答①

また，ワークシート作成時に工夫・配慮した点について，選択式のワークシートを用いたことにより，どの生徒も選択肢を活用して十分に記入できていた。また，やはり感受→知覚の順番で取り組むことにより，生徒は感じたことを書くことで曲のイメージが出来，音楽を形づくっている要素に着目して書くことができていた(図 18)。

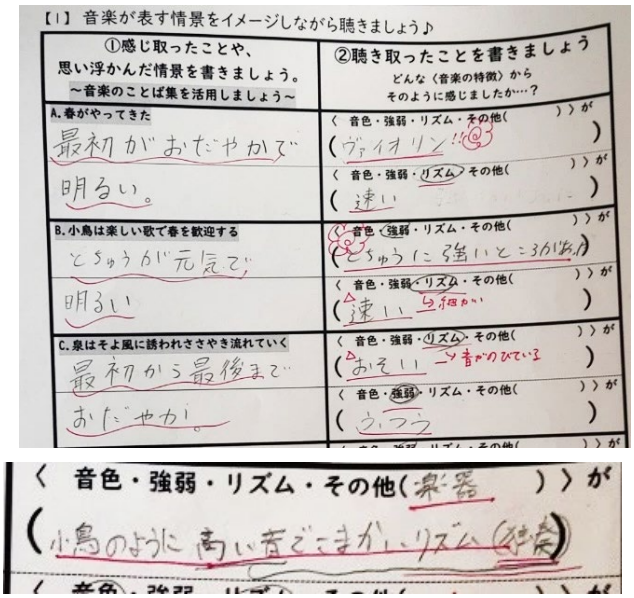


図 18　生徒の回答②

反対に，授業実践を行う中でワークシートを改善した点もある。他の学級で使用した「(　　)な感じ。」という枠を設けたワークシートと，M 組で使用した何も書いていないワークシートである。結果として，「(　　)な感じ。」という枠を設けたワークシートは単語で簡潔に書いている生徒が多く，そうでない枠の M 組では文章で自分のイメージを自由に書けていた。そのため，感受の部分では枠を設けず，自由に感じた事を書くワークシートが適していたことがわかった(図 19)。

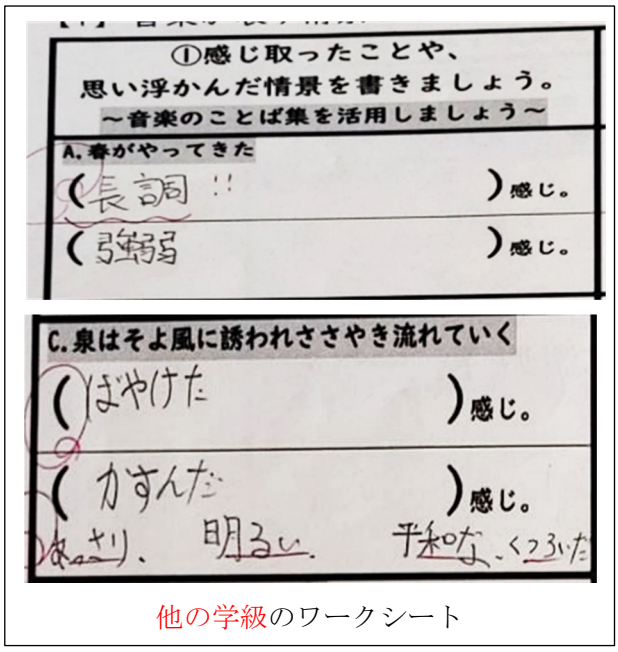
○ソネットクイズ

本実践で，クイズ形式でソネットを学習したことで 3 時間目の“知覚”“感受”の学習の準備を行うことができた。それは，音楽に合うとネットを選ぶために，「どうしてそう思うのか」を説明しなければならないからである。ソネットのどの部分が音楽にどのように表れているとかんじたのか，または音楽を聴いた時にこんな感じの気持ちになったから，等，「音楽を聴く」ことについて理由や意味を考えられる学習活動となったからであると考える(図 20)。

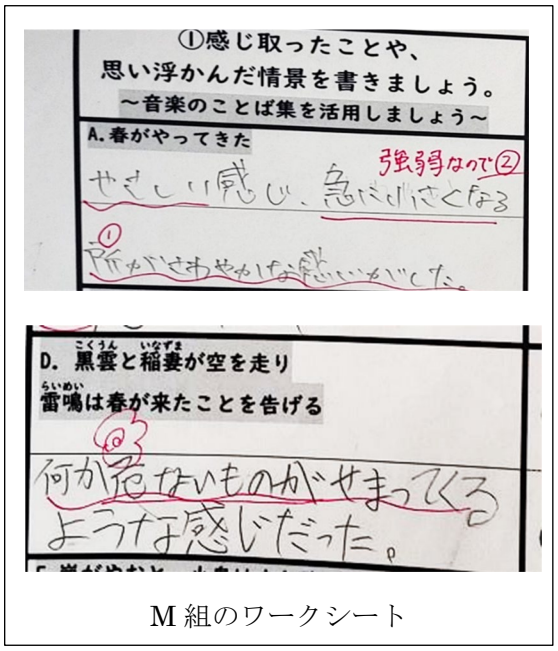
○グループ活動

学習活動の工夫について活動をスモールステップ化したことでより多くの生徒の思いや考えが生きてくるようになったと実感した。また生徒同士で共有する中で，「知覚」と「感受」で枠を分けてホワイトボードにまとめている班もあった。ただし，時間の設定に課題が残った。時間を持て余してしまうよりも，「もっと話したかった」と思うくらいでやめ，次の活動に移る方がより活発に意見が共有される場合もあった。

また，話し合いに関しても，話し合う際の決まりや，司会をするための文言のテンプレートがあるとスムーズに進む。実践校においても学校で統



他の学級のワークシート



M 組のワークシート

図 19　N 組のワークシートと，改善後の M 組のワークシート

一したものがあったことから活用した。これらを使用し，グループ活動を行うときのルールとして定着化することで，これ以降の学習でもスムーズに，安心して行うことができるようになったと考える。

また，3・4 時間目の“感受”“知覚”では，スモールステップ化した学習活動に加え，グループごとに担当のソネットを決めまとめ，発表を行う，という方法を取った。その結果，より多くの感じ方・聴き方がまとめられ，生徒は一人で発表することよりもハードルが低く，役割を持って様々な思いや考えを積極的に伝え合うことができていた。一つのソネットだけでも 10 以上の感じたこと・聴き取ったことが共有され，生徒自身も感じ方の違いや新鮮な発見があり，驚きや納得する姿が授業中に垣間見えた。また，発表することに関して，社会的評価懸念や自己イメージ不一致等の恥感情が懸念されていた点についても，まず小さなグループ内で互いの思いを認め合う段階を取ることでハードルが軽減されたのではないかと考えることができる。その結果，多様な意見がホワイトボードに反映されていた (図 21)。

しかし，学習活動の工夫・配慮においての課題として，ただ活動をスモールステップ化するだけではなく，より時間の調節をこだわる事が必要であることがわかった。ペアで共有する時間を多くとってしまうと，時間を持て余し遊び始めてしまったり，別の話題が出たりするため，「もっと話したかった」と思うくらいの余韻を残すことで，その後の活動がより活発になった。

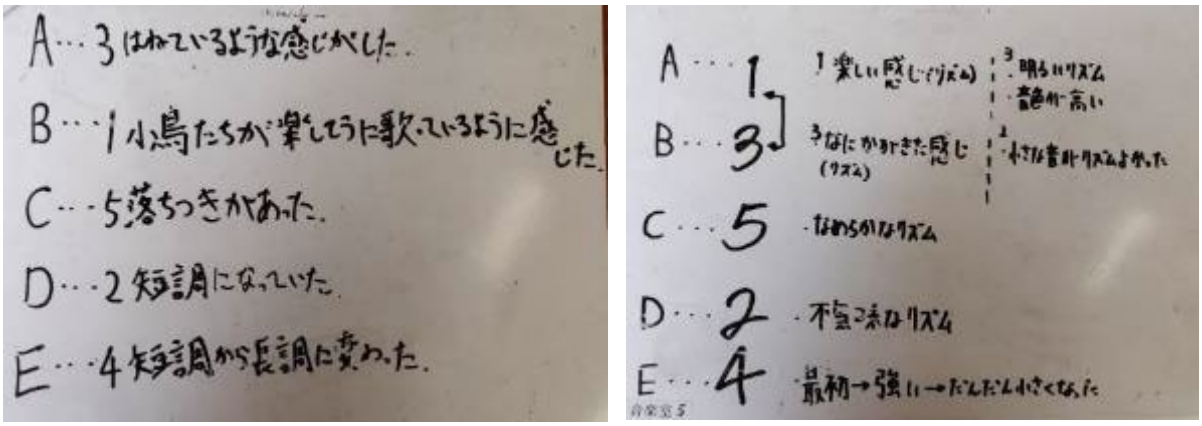


図 20　グループワークで使用したホワイトボード

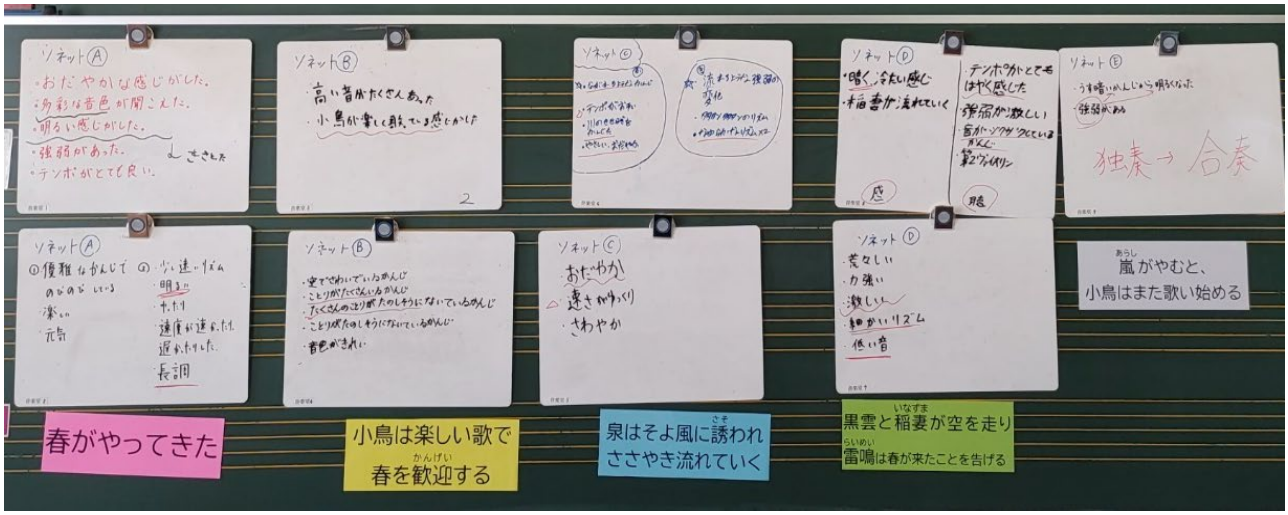


図 21　担当のソネットについて各グループでまとめたホワイトボード

4.本研究の総合考察

4-1.本研究の成果

(1)研究Ⅰについて

アンケート調査を行い，生徒が持つ音楽の授業に対する思いや考えについての実態把握を行った。その結果，音楽を聴いたり映像を観たりすることは好きな生徒が多く，楽譜を読みながら「聴くこと」,音楽を形づくっている要素に着目すること」,「言葉で表現すること」等になると好きではないと回答する生徒が多かった。音楽科における「聴くこと」になるとあまり好きではないと回答する生徒が多くいることとの関連がうかがえた。しかし，その思いや考えとして,「苦手である」「できない」というネガティブな感情を持つ生徒ばかりではなく,「できないけれどもやってみたい」「出来るようになりたい」という意欲的な生徒も多く居ることがわかった。

アンケート結果を踏まえ，音楽の授業に対する生徒の苦手やできない・難しい，と感じている部分に対し，ユニバーサルデザインの視点を意識して指導面を改善したり工夫・配慮したりすることで，生徒の気持ちに寄り添い，多様な音楽経験を持っていても安心して取り組めるような授業づくりを行った。

(2)研究Ⅱについて。

研究Ⅰのアンケート結果から，ユニバーサルデザインの視点を意識しながら授業実践計画を立て，授業を作成した。その際に，〈授業計画/教具/学習活動/教室環境/〉の四つの点で行った工夫･配慮を整理していった。

授業計画の工夫・配慮では，音楽を鑑賞する上で必要な音楽を形づくっている要素・曲の形式・使用されている楽器について等，まずは1･2時間目に知識面を学習したことで，その後に音楽を鑑賞する際，その知識を生かして，楽器の音色・ソネット・リズム等と音楽表現の繋がりに着目しながら聴き取る事ができていた。また，ワークシート作成時に，音楽から「感受」したことを先に書き，後に知覚したことを書く学習の流れを設定していた。こうすることで，音楽を聴き感じたことに対し，音楽を形づくっている要素に着目しながら，根拠を持って音楽を聴き取ることができていた。ワークシートの書きぶりを見ると，特に「苦手・出来ない」，そして「あまり好きではない」，と感じている生徒が多かったにも関わらず，ワークシートにも多様な感じたことについての記述がみられた。

他にも，豊かな言葉を用いて文章に表現できている生徒が多かったことは，ワークシートを選択式にしたり，音楽を聴く際の声掛けに工夫・配慮したりしたことが生かされているのだと考察する。音楽を聴く前にソネットを読み，間を取って音楽を聴くことに集中を促す，写真を用いてスライドで視覚的に補助する等，工夫・配慮を行ったことで，より情景を思い浮かべやすくなっていたのだと考えられる。

学習活動のスモールステップ化をすることでより積極的な批評や共有ができていた。生徒達は，共有しながら「そのようなイメージもできるんだね。」「なるほど。」と互いに共感し合ったり，感嘆したりするような姿もみられた。特に音楽は，得に自分の声やその他楽器，言葉などを使って自分の思いを表現したり，他者に伝えようとしたりする気持ちが大切になってくるが，音楽経験がまだ少ない生徒にとって，音楽の授業で発言するということの重大さは計り知れないものであったと本研究を通して改めて実感した。そのため，共感的な場を作るように意識することで，社会的評価懸念や自己イメージ不一致のような「恥」が感じられる場面が少なくなり，生徒が安心して取り組むことができていたのだと考えられる。

音楽科の授業における「聴くこと」に関しても同様である。音楽を形づくっている要素に着目しながら聴覚を働かせ，聴いたことを自分の中でイメージや情景を思い浮かばせ，他者と言葉で伝え合うことは，日常生活とはかけ離れた学習内容であり，生徒の姿を見ながら困難さを改めて実感した。しかし，何か一つの声掛けを加えることで，何か一つの順番を変えることで，学習の見通しが立ち，学習内容を一歩一歩スモールステップで整

理していくことで，生徒は目の前の学習に集中して打ち込むことができる。その「何か一つ」の工夫･配慮を考えていくことが, 教育の UD であり，音楽科の授業には必要な視点であることが分かった。

4-2.本研究の課題と今後の展望

研究 I でとったアンケート項目と同じもので事後アンケート調査を行ったところ，生徒の回答から有意差は見られず，授業前から維持した結果になったことが課題として挙げられる。

しかし，学習を終えた生徒の感想の中には「ソネットが違うだけでこんなにも音色が違う。聴き取ったことを今度からもっと詳しく書こうと思った。」「自分の感じた季節の感じが，作曲者の感じたことと違い，新鮮な感じがした。」「全てが違う物語のように感じた。」というような記述もあった。教師の目線で考えると，これらの経験は「多様な音楽経験」であり，UD の視点を意識することで鑑賞の学習に深まりが出たことがうかがえる感想であると考察している。この課題を踏まえ，この音楽経験が生徒の中で生き,「できた。」「音楽って楽しい。」という実感に結びつけていく授業にしていく必要があるとわかる。

また，生徒の実感が得られることをねらい，ある程度継続的に行っていくことで，これらの UD の視点を意識した授業の在り方が生徒の中で定着し，変容に繋がっていく可能性も考えられる。UD の視点を意識することは,「新しく何かを作り出すよりも“何か一つ”の工夫・配慮をしていくことで簡単に取り組めるものであり，継続が困難ではないこと」そして「ほんの少しの意識で生徒の姿も変わり，それらを行うことで授業中の教師の負担が軽減されることも期待されるから」である。教師が生徒の様子を見る余裕が増えることでより生徒とのコミュニケーションを取る時間も増え，生徒の思いに寄り添うことができるため，授業中の安心感に繋がるのではないかと考察している。

最後に，音楽の楽しみ方や音楽に対する価値観は人それぞれであり，その多様な価値観をもつ教科の特性を全て理解し，捉えることは容易ではない。しかし，生徒が安心して学ぶ環境を整えるために UD の視点を意識すること，それは自らの指導や環境づくり等の方法を見直すこと・整理することでもあり，教師が自身の音楽の価値観と向き合うことにも繋がっていくと考察する。

本研究で整理した UD の視点を意識した工夫・配慮が，音楽科における授業のアイデアの一つとして，これからも実践・改善し続けられていくことを期待している。

5.引用文献

阿部 利彦・赤坂 真二・川上 康則・松久 眞実 (2019). 人的環境のユニバーサルデザイン 東洋館出版社

阿部 利彦 (2017). 決定版！授業のユニバーサルデザインと合理的配慮　金子書房

青森県総合学校教育センター (2016). 授業 UD の視点を取り入れた授業づくりについて　学校のユニバーサルデザインプロジェクト

荒木 千尋 (2020). 中学校音楽科における学びのユニバーサルデザインを活用した授業づくり 福岡教育大学大学院教職実践先行年報，10, 113-114

藤江市教育委員会 (2019). ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりの工夫

花熊 曉・米田 和子 (2016). 中学校ユニバーサルデザインと合理的配慮でつくる授業と支援 明治図書出版

花熊 曉 (2018). ユニバーサルデザインの学級・授業づくりの意義と課題　社会問題研究，67, 1-10. http://doi.org/10.24729/00003027

畑田 麻由美・菅 裕 (2010). 音楽演奏活動における動機づけおよび心理的欲求　中国四国教育学会　教育学ジャーナル，6，11-19.

樋口 匡貴 (2002). 公恥状況および私恥状況における恥の発生メカニズムー恥の下位情緒別の発生プロセスの検討ー　感情心理学研究 9(2), 112-120.

平松 舞・山中 和佳子 (2019). 中学校音楽科にお

ける鑑賞授業の実際―音楽の言語活動と他者との共有に着目して―　福岡教育大学大学院教職実践先行年報，9，95-103.

廣津 友香 (2019). 授業のユニバーサルデザインの視点を取り入れた音楽科の授業－感想授業における学習支援―　熊本大学教育学部紀要，69，47-56.

市川 郁子 (2020). 音楽科における「主体的・対話的で深い学び」　大谷学報 98(1)，23-44.

菊池 哲平 (2020). インクルーシブ教育システムにおける授業のユニバーサルデザイン化の意義に関する理論検討　熊本大学教育学部紀要，69，47-56.

京都府スーパーサポートセンターSSC (2018). これでスッキリ！ユニバーサルデザイン授業 京都府リーフレット，1-5.

文部科学省 (2017). 中学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説 音楽科編

文部科学省国立教育政策研究所 教育課程研究センター (2021).「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 中学校 音楽

松戸 結佳 (2022).「学びのユニバーサルデザイン」と「授業のユニバーサルデザイン」の関係性 早稲田大学　教育総合科学学術院　学術研究(人文科学・社会科学編)，70，69-89.

増田 謙太郎 (2019).「音楽」のユニバーサルデザイン　授業づくりをチェンジする 15 のポイント　明治図書出版

森 美幸 (2015). 音楽活動を支える基礎的な能力をはぐくむ―思考ツールをいかした授業の工夫―　滋賀大学教育学部附属中学校研究紀要，57 集，58-63.

NC State University, The Center for Universal Design. (1997). ユニバーサルデザインの原則 ver.2.0 , Defining Universal Design (UD) (ncsu.edu) (2023/01/25 閲覧)

日本授業 UD 学会(2020). 一般社団法人日本授業 UD 学会 HP　HOME of Japan　(2022/10/19 閲覧)

岡田 知也・堀田 真央 (2020). 新たな視点による中学校音楽科鑑賞領域における音楽の教材化に関する実践的研究(2)　香川大学教育学部実践総合研究（Bull. Educ. Res. Teach. Develop. Kagawa Univ.），41，79-88.

岡田 暁生 (2009). 音楽の聴き方　中公新書

尾崎 祐司 (2016). 音楽科でのインクルーシブ教育における「学力保障」の観点―「拡大したコアカリキュラム」への着目　上越大学研究紀要，36（1），218-227.

新山王 政和 (2021). 音楽の授業における「言語活動」と「主体的に学習に取り組む態度の評価」の在り方について－文部科学省の資料の整理に基づいて－　愛知県教育大学教職キャリアセンター紀要，6，161-168.

佐賀県教育センター (2015). 児童生徒の知覚・感受を深める指導の手立て

佐藤 隆也 (2018). ユニバーサルデザインの視点による授業改善の考察―アクティブラーニングとの関連―　川崎医療福祉学会誌, 27,（.2）259-268.

東京都福祉保健局生活福祉部地域福祉推進課 (2011). 東京都カラーユニバーサルデザインガイドライン

武本 京子・山口茉莉子(2020).「イメージ奏法」による協働学習により，ダイバーシティを受容しインクルーシブ・リーダーシップを育成する音楽教育―中学校の音楽の授業実践における合唱指導報告―　金城学院大学論集　人文学編 16（2），110-122.

中央教育審議会 (2021).「令和の日本型教育」の構築を目指して～すべての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現～(答申)

吉田 秀文 (2011).音楽学習における動機づけと持続性に関する一研究―自己調整学習の研究成果を踏まえて―　群馬大学教育学部紀要 芸術・技術・体育・生活科学編，46，13-19.

（2023 年 1 月 31 日　受理）